HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	滝浦, 真人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7006号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65749
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Masato_Takiura_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　滝　浦　　真　人

主査　教　授　　加　藤　重　広
審査委員　副査　特任教授　小　野　芳　彦
副査　教　授　　野　村　益　寛

学位論文題名
日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究

本論文は，申請者によるこれまでの４冊の著作をもとに，加除・再構成してまとめなおして，論文博士学位申請論文として提出されたものである。思想史・文法学説史などを踏まえて従来の「敬意の敬語論」の問題点を剔抉し，新しい距離の敬語論を提唱している。距離の敬語論は，語用論研究の主要な成果の一つであるポライトネス理論との親和性があることから，これを基盤にした上でさらに発展させ，社会語用論における新しい知見を提案した論考になっている。加えて，日本語コミュニケーションの通時的比較，中国語コミュニケーションや韓国語コミュニケーションの記述と分析を踏まえた，実証的な対照語用論研究をおこなっている。以上の研究は言語学，主に社会語用論的な研究であるが，さらに，社会学や思想史，社会史の知見，社会心理学や文化人類学，民俗学などの成果も利用し，文学作品のデータ分析も折り込み，幅広く多角的に敬語とコミュニケーションについて論じた研究である。

本論文は，まず日本語の敬語が文法現象として記述されて文法体系に取り込まれ，「敬意」という，精神論的な概念を軸に敬語論が形成されていった背後にナショナリズムに傾斜する時代思潮があったことを鮮やかに論証している。特に，山田文法の成果のなかでもあまり耳目を集めない敬語論では，敬語が人称と過剰に結びつけられて法則化され，その後例外が見つかっても「敬語的人称」として保持されることで，文法論のみならず敬語研究をゆがめる結果になったことを明晰に示し，丁寧な事実記述の積み上げによって論証した点できわめて学術的価値が高い。

次いで，1980 年代から影響力ある理論として用いられてきたポライトネス理論を精緻に読み解き，配慮という逸脱性の観点から５階梯をなすモデルとして再構築している。そこからさらに，敬語を《距離》の表現として再定義し，敬語の語用論として遠隔化・近接化を軸に，推意の形成として多様な効果を持ちうるしくみを解明した手法は鮮やかである。例えば，遠隔化は神聖視や品位の解釈だけでなく，疎外や皮肉といった推意も引き出すことができ，それらの推意の結晶化こそが敬語の語法となるが，そのみちすじとしくみを解明することで，現象の記述に終始した従前の敬語論の不備をはしなくも白日の下にさらしたとすら言えよう。

距離の語用論は，呼称のポライトネスの相対性，日本語の指示詞の使い分けにおける距離感対立による語用論的効果を説得的に説明でき，終助詞の持つ対人的表出の機能をモダリティとして曖昧に記述することなく，意味論的な単純記述，語用論的な動機，談話機能の緻密な記述によってその運用システムを明晰に整理するなど，これまで文法論と語用論のはざまで見解の定まらなかった問題も手際よく分析して見せている。この種の語用論的課題への種々の貢献を第３の成果とみることができる。

第４点として，現代日本語以外に韓国語・中国語におけるコミュニケーション，明治・大正の日本語のコミュニケーション，江戸の庶民の会話，などをさまざまな資料やデータをもとに分析し，比較対照研究をおこなった対照語用論の成果がある。現代日本語では定型化が進んでおり，そこには近代以降の標準語教育の強い影響が及んでいること，中国語のコミュニケーションでは，家族など親しい関係で挨拶が不活発で，距離によって劇的な変化を見せる点で日本語と対照的なこと，韓国語のコミュニケーションではポジティブ・ポライトネスが顕在的で対人距離に応じた表現選択の

振幅の大きさが日本語と大きく異なること，などは，対照語用論的に興味深い指摘であり，社会語用論から比較文化論へと越境しつつ分析するダイナミックさは今後の語用論研究の広がりを示すものとも言える。

本論文は単にこれまでの研究成果の集大成としての労作であるのみならず，成果のインパクトや今後の展開の可能性を考えると，言語学，なかんずく語用論における重要な研究成果であることは誰しも否定し得ないであろう。また，思想史的分析，近世から近代にかけての文学テクストを用いた論考とデータに基づく分析，社会学，社会心理学，民俗学，文化人類学，比較文化論などの成果を咀嚼して言語研究に新たな展開の可能性をもたらすことは，その該博な知識と分析装置を駆使する応用力があって初めて可能になるものであり，細分化された専門研究の枠を越えて自由闊達に柔軟な発想で分析した成果はすでに学術的に高い評価を受けてもいる。それに値する成果と当委員会も判断した。もちろん，異なる著作を統合したことに起因する若干の不整合やなど不備が全くないわけではないが，それらは巨大な学術的成果に比すれば顧慮するほどのものではない。

以上の通り，本論文について，審査委員会は全員一致して論文博士の授与に十分値すると判断したものである。